

徒然草十三段の、

独りともしびのもとにふみをひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる。

あるいは、江戸時代後期の越前の歌人、橘曙覧^{あけみ}の和歌、

楽しみはそぞろ読みゆくふみの中に我にひとしき人を見し時

は古今の名言・名歌で、「ふみ」なるものの本質を言いおおせている。もとより、これらの「ふみ」は誰かの手紙ではなく、書物を指している。考えてみると、書物も手紙もともに大和言葉で「ふみ」という以外にないのは妙なことで、それは漢語における「書」も同様であり、和漢の古代人にとって両者が同じものであったことを意味している。つまり、「ふみ」は生身の人間の口を介することなく、時ないし場所を異にする他者との意思疎通^{コミュニケーション}を図るための道具というのがその第一義なのであった。とりわけ古人にとって書物は、場所よりも時を超越する、つまり個体としての死を乗り越える具としての意義が格段に大きかったに違はなく、そのことに対する素朴な感慨を、前に掲げた名言・名歌は端的に表現している。そのような使命を帯びた「ふみ」を収納する「くら」ないしタイムカプセルが「ふみくら=文庫」なのである。

明治時代、西三河の小城下町西尾に岩瀬弥助という男がいた。慶応三年（一八六七）生まれというから夏目漱石と同庚である。小学校を卒業して実社会に出、肥料商山本屋の主として事業に成功、若くして幡豆郡^{はす}随一の資産家となる。地元の口碑では株の相場場で財を成したとも伝えている。西尾町長や西尾鉄道（名鉄西尾線の前身）の初代社長をも務めたが、いわゆる学者・研究者ではない。この実業家が四十二歳の明治四十一年に文庫を設立公開した。

ここで岩瀬文庫の特徴を指摘しておきたい。まず第一に、当初より一般に対して公開された私立図書館であった。文庫には講演の出来る会堂や庭園を併設し、婦人専用閲覧席や子供のための児童館までもが配慮されていた。第二に、当時一般的な書物であった洋装本も多く含んではいるものの、あくまでも和漢および朝鮮の古典籍を主体とする収集であった。その集書は特定の分野に偏ることのない、豊富にして雑駁な内容を備えている。その一方、内容を吟味することなく、古書店の棚を片っ端から買いあさるような乱暴な集め方ではなく、一定の見識をもって選書が成されていた。たとえば、我々の悉皆調査の過程で単純な重複本がほとんど見られなかったが、これはその一証左となろう。第三に、書物を収めるために、異様なほどに堅牢な構造の書庫が建造された。地上三階・地下一階、木造の土蔵造りながら、外壁は煉瓦よりも耐久性に優れた特製タイルで覆われ、窓枠等の要所には石を用いつつ、屋根は地元名産の三州瓦で葺くという和洋折衷の斬新な建物である（写真参照）。

以上の特徴はいったい何を意味しているのでしょうか。弥助自身はその間の経緯をほとんど書き残していないために、何を考えていたのか具体的に知ることは出来ない。唯一、残されているのが、文庫設立を記念して、地元の伊文神社^{いぶん}に弥助が奉献建立した石灯籠（写

真参照)に刻まれた、わずか八十文字の銘文である。そこには以下の通り記されている。敢えて正確に原文を示しておく。

余嘗欲設立一小文庫
施之於身於人且傳之
于不朽因聚書數年今
也積至數千卷乃相地
于宇新屋敷經營于明
治四十年一月公開于
其十月六日於是乎吾
宿志少酬矣乃以是日
建此以爲之記念云

岩瀬彌助識

試みに訓読しておこう。

余嘗て、一小文庫を設立し、之を身にも人にも施し、且つ之を不朽に伝えんと欲す。因て書を聚むること数年、今や積みて数千卷に至る。乃ち地を宇新屋敷に相し、明治四十年一月に經營し、其の十月六日に公開す。是に於てか、吾が宿志、少しく酬われたり。乃ち是の日を以て此を建て、以て之が記念となすと云う。

文中の「經營」は、建物の縄張りをして土台を築く意。また、公開予定日の明治四十年十月六日というのは弥助満四十歳の誕生日で、実際の公開は工事が遅延したために半年後の明治四十一年五月六日となった。

ここには文庫設立の重要な意図が書き記されている。すなわち、設立した文庫を「身にも人にも施」すことによって、「不朽に伝」えようというのである。つまり、集めた書物を個人的に楽しむのではなく「一般社会に公開提供すること」、同時にそのことによって書物を「未来永劫に保存してゆくこと」、この二つの理念が明確に表現されている。

金持ちが高価な書物を買集めるのは、古今東西をとわず、よくある図である。が、多くの場合、収集家の死あるいは事業の不首尾により、折角集めた書物は散逸してしまったり、そうならずとも死蔵から湮滅への道筋をたどる。これでは「文庫」にはなっていないのである。

弥助は昭和五年一月三日に六十四歳で没し、遺言によって文庫は財団法人となる。その後、戦中戦後という困難な時期に際し危機的状況が何度もあったが、結局のところ市民の後押しによって書物は失われることなく維持され続けた。幸い西尾にはほとんど戦災もなく、ただ昭和二十年一月に三河地震が地元で惨害をもたらしたが、堅牢な書庫は僅かなひびが入っただけでびくともしなかった。岩瀬文庫に入ったおかげで救われた古書も数多いはずである。その後、文庫は西尾市の所管となり、平成十五年四月には斬新かつ堅牢な新文庫館と新書庫が建設され、岩瀬文庫は日本初の古書ミュージアムとして新たな一歩を踏み出した(写真参照)。それもこれも、弥助の配慮が見事に功を奏したというべきであろう。公立私立を問わず、世の中にありとある文庫に関係する人々は、前に掲げた弥助の銘文をよくよくかみしめていただきたい。

人間の短い一生に比べ、悠久の命を保ちうる書物にも危機は訪れる。それをもたらす最

大の敵は、火でも水でも虫でもなく、いつの時代にあっても人である。岩瀬文庫が形成されたころは、古典籍にとって苦難の時代であった。十九世紀の世界情勢の中にあつて、明治日本がまず遂行すべき急務は、前代までの封建制度を払拭して中央集権国家を確立することにあつた。そのためには、あたかも中央集権が太古の昔より続いている、本質的的制度であるように装う必要があり、大量に残された前近代、その大部分は江戸時代に作られた文献の数々は、参照するまでもない、時にはかえって具合の悪いものであつたはずである。明治政府の行った国語表記の改革により、変体仮名と草書体筆記は学校教育より退けられ、その結果、前近代の文献資料は一般の人々から縁遠い存在となつて、現代に至っている。また、江戸時代の書物文化は、写本と版本が平行して行われる二重構造がその特徴で、つまり人々は版本では表現できないような話題をも写本で享受し、また多くの人々が写本を作ることによって書物作りに関与した。ところが、明治の表記改革は写本作りを困難にし、また前代の豊かな写本文化も忘れ去られた。ついには書物作りは専門家の手にのみゆだねられ、そのことが一方で言論統制を容易にしたことは言うまでもない。

そのような時代にあつて、岩瀬弥助が敢えて古典籍専門の文庫を形成しようとしたのは、一つの見識であつた。あるいは世の中から軽視されつつある和本類に対して、相場師的な「買い」の感覚が働いたのかもしれない。が、その背景に、日本から永遠に失われようとする封建の時代への哀惜の念があつたに違いない。たとえば、悉皆調査の過程で、岩瀬文庫には地方の地誌関係の本が比較的手厚く集められていることに気付いた。中央集権化の一方で、明治時代には各地において、江戸時代に、あるいは新たに編纂された地誌が、多くは大部の和装活版書として数々刊行された。この動きは、前代までの地方の記憶をとどめておきたいという危機意識のようなものを感じさせる。岩瀬文庫にそれらの多くを網羅することは偶然ではないように思われる。

封建の記憶が完全に忘れ去られ、近代を問い直す意識さえ希薄となつた現代にあつて、このような文庫の存在する意義はますます大きい。しかしながら、人々、さらには研究者や学生さえ、文庫から足を遠ざけつつあるように感ぜられる。前に述べた表記の問題、それから学問の細分化に伴う全体的な浅薄化、さらには同時代的要請ばかりに目を向ける、大学環境における実学重視の風潮などがその傾向に拍車をかけている。このことは将来、世の中の文庫に危機的状況をもたらすことになりかねないだろう。

我々は五年前より岩瀬文庫の悉皆調査と書誌データベースの作成に没頭している。そのねらいは何かというと、各古典籍の内容や書物としての特徴を、出来るだけ詳細に世の中に知らしめることにある。つい数日前に見た本を例にして示そう。

『三河考』写本一冊。これだけでは何が書いてあるやらかからない。よほど暇な人でない限り、繙こうとは考えないだろう。内容は三河国とは関係なく、伊勢神宮の神域の境界を成した下樋小川・磯部川・櫛田川の三つの川について、文献と实地踏査により上古の位置を考証した書であつた。明治二十七年六月十九日付の無記名の書写識語があり、筆跡より神宮の神職で国学者の御みかんなぎ巫清直による書写とわかる。その識語には、同書は「師家」あじろひろのり（足代弘訓）の原稿を筆写したもので、「三河考」の表題を付けたのは「克恭」などとある（『国書総目録』に本書を御巫清直著とするが誤りである）。以上のような内容や書誌情報を目録（書誌データベース）に記述しておくこと、将来関連する事柄に興味のあ

る人は原本を参照してくれるだろう。また、識語にある「克恭」が手近の人名辞書類では出てこない。が、これまで入力したデータベースを検索すると、御巫清直関係のいくつかの書物を書写した福本克恭なる人物が浮かび上がってくる。このように別々に置かれた資料同士の連関が、データベースを検索することによって瞬時に判明するわけである。

有名文庫を訪れるとしばしば生き字引のような司書がおられ、適切な教えを得ることが出来る。ところが、その人もいつかは年をとって文庫を離れる日が来る。とたんに文庫の活気が失われる、というようなことがよくある。書誌データベースの存在はそのような事態を防ぎ、文庫はいつまでも情報を発信し続けて活用に使われるであろう。

【付 記】

○我々の書誌データベースの詳細は、名古屋大学附属図書館の古典籍データベースを御参照下さい（同図書館ホームページ→古典籍DBへ）。

○古典籍や古文書の保存と活用にお困りの方は、（私が元気な間は）手弁当で参上し、お手伝いをさせていただきます。

（しおむら・こう 名古屋大学大学院文学研究科教授・日本文学）